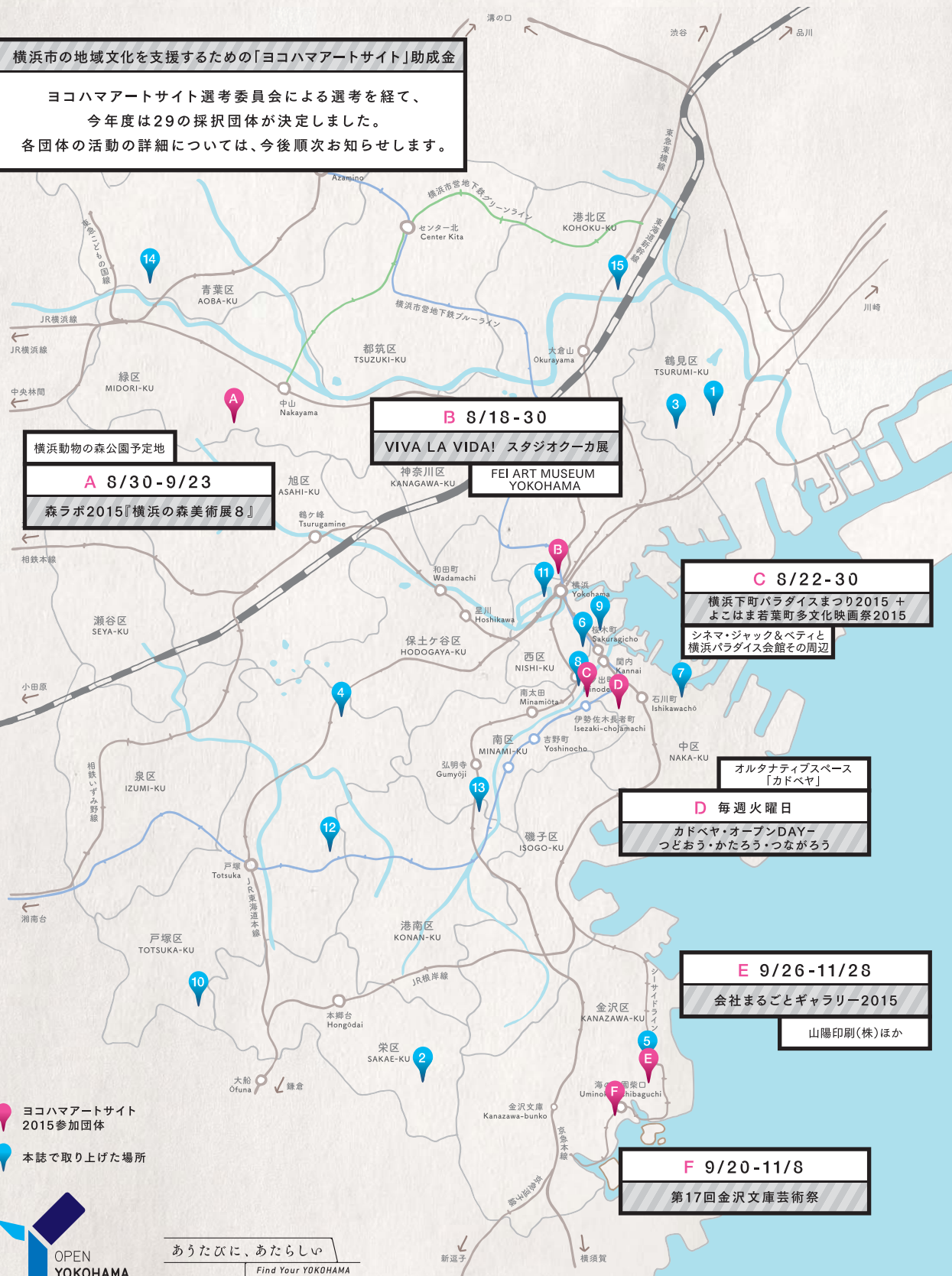


YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2015参加団体による
7月～9月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。



ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する



鶴見区・東寺尾図書館

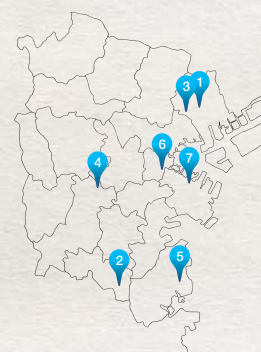
最新情報・詳細はこちら <http://www.y-artsite.org/>

ヨコハマアートサイト

2015
Vol.

004

「特集 本がつなぐ地域」



紙とインクのおいで届ける



手づくりの図書館で本と出会う人と出会う

鶴見区の東寺尾図書館(館長・木下郁子さん)は私設の図書館である。今日はバザーが催され、緑に囲まれた木造二階建ての図書館は、どの部屋も大にぎわい。通り抜けるのも大変だ。

開館は1948年。教育機関の整備が進められた際に、それまで町の集会場であった物置を活用し、40冊の本からスタートした。本が今より高価であった時代、文化的な環境を作りたいという地域の人々の思いがこの場所をつくった

のだ。その後、活動は図書の貸出しにとどまらず、学習会や料理講習会なども催され、自然と地域コミュニティの中心になっていった。「うちの祖母の頃は、図書館で費用を集めて旅行に行ったりしていたみたいだね。まだバス会社のツアーも普及していなかったし、ここがそういうのも取りまとめでさ」と、模擬店準備をしている男性が教えてくれた。現在では図書の閲覧の機会は限られているが、学習塾やサークル活動の場として、変わらず地域の人々に親しまれている。

本を中心としたコミュニティの拠点としては、個人やグループが

それぞれの蔵書や、市立図書館の団体貸出しサービスを利用して運営する地域文庫・家庭文庫といった活動も、今なお健在だ。栄区の「おむすび文庫」は、地域とつながりたいという思いから自宅を開放している家庭文庫だ。やわらかく陽の差しこむリビングにはオーナーの早川亜紀さんが集めた児童書や絵本がぎっしり。並んだ本は二千冊を越えるという。「間に本を置くことで、いつもとは少し違うコミュニケーションがとれるんですよね」。営業日の午後には、近くの小学生が学校や塾とはまた違う、ちょっぴり特別な時間を過ごしにやってくる。





4
本を売るだけでなく
地域に
文化で恩返し

「東寺尾図書館には、小さいころ算数を習いに通ってましたよ。懐かしいなあ」と笑うのは、有隣堂の出版部・佐野晋部長だ。有隣堂は、1909年の創業時から今日に至るまで、書店の経営と並行し、出版を通じて横浜の地域文化を支えている。



5 6 7
地域文化を支える
アートサイト
2015

今年度のヨコハマアートサイト2015では、市内で行われる29団体のアート活動をサポートする。そのうち、金沢区のアーティストネットワーク+コンパスは「会社まるごとギャラリー2015」と題した展示会を九月に開催予定。工業団地にある印刷会社を中核に、近隣の工場から出る廃材などを素材にして、アーティストたちが意外な作品を生み出していく。

また、紙芝居文化推進協議会は、西区で開催する「第16回手づくり紙芝居コンクール」の準備を進めている。双方向性のある物語世界を表現する紙芝居の魅力を伝えるため、研究やネットワークづくりにも力を注いでいる。

さらに横浜には開化期の横浜を多くの作品に描いた作家・大佛次郎を紹介する文化施設である大佛次郎記念館があり様々な催しを行っている。

本と、本をとりまく場所からは、今日も人々の声が聞こえる。地域文化の真ん中に本がある。

- P.1 鶴見区・アマガサ印刷所
- P.2 栄区・おむすび文庫
- P.3左 鶴見区・東寺尾図書館
- P.3左下 鶴見区・アマガサ印刷所
- P.3中上 鶴見区・東寺尾図書館
- P.3中下 有隣堂独自の出版物
- P.3右 アーティストネットワーク+コンパス ワークショップ風景



隔月発行の情報誌「有隣」は、5月に538号を刊行。新書サイズの出版物である有隣新書はベストセラー『相模のものふたち』をはじめとし、今ではシリーズ76冊目を数える。「同じ会社に書店があるということは恵まれているなと思いますね。派手な本の宣伝をかけなくても、真面目



に本を作っていけば、店に並べてもらえるから」。今も年間三点のペースで、出版を行っている。商品の販売だけでなく、文化的に地域に貢献するために、まずは地域のことを知ってもらおうという考えで始まった出版事業。本を生み出す側にも、文化への思いがあふれている。

3
昔ながらの味がいい
手仕事が光る
活版印刷

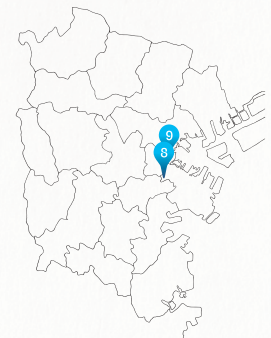
工場の中で、大きな音を立てて稼働する蒸気機関車のような機械。鶴見区にあるアマガサ印刷所は、このドイツ製の印刷機を使い、現在でも活版印刷を行っている。壁際には活字棚が並び、大小さまざまな活字がイロハ順に収められている。専用のケースに、鉛でできた活字を並べ、金属の枠に組み付けて版を作る。両手ほどの大きさの版でも、持ち上げるとずしりと重い。

かつては警察署の書類や、防災新聞などの印刷を請け負っていたが、近年ではアートの視点で活版印刷を選ぶ人が増えているという。「デザイナーの方から、活版ならではの手触りがある印刷をして欲しいという注文が入るようになりましたね。昔は凹凸が出ないように印刷をするっていうのが、腕のいい職人の証でもあったんですよ。時代っていうのは不思議ですよ」と天笠将孝さんは語る。長年の経験で培われた感覚により、機械の微調整を行うことでさまざまな表現が可能となるのだ。



ヨコハマ
アートサイト
ラウンジ
Vol.5

参加するアート



【会場】高架下スタジオSite-D 集会場(神奈川県横浜市中区黄金町1-2)【ゲスト】田中玲子(認定NPO法人トリトン・アーツ・ネットワーク ディレクター)/堀木結(横浜トリエンナーレ組織委員会/公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団)【主催】ヨコハマアートサイト事務局

近年では、アートプロジェクトを多くのサポーターが支えています。こうした市民参加にはどのような魅力や課題があるのでしょうか。3月23日に開催したヨコハマアートサイトラウンジ第5回では、そんな市民協働の今についてのトークを行いました。

まずは、横浜トリエンナーレ組織委員会の堀木結さんより、昨年開催されたヨコハマトリエンナーレ2014での市民サポーター活動の様子を。続いて、東京・晴海で活動するトリトン・アーツ・ネットワークディレクターである田中玲子さんより、音楽を中心としたコミュニティ活動をご紹介いただきました。「サポーターさんの持つ興味やスキルが活かせる場をつくることで、活動そのものが、より広がる可能性があると思うんです」。

サポーターと
立場を越えて
協力しあう



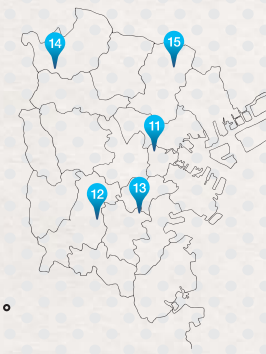
キックオフ・
ミーティング
Report

【会場】BUKATSUDO ホール(横浜市西区みなとみらい2-2-1 ランドマークプラザドックヤードガーデンB1F)

横浜の地域文化を支援するヨコハマアートサイト。毎年、市民やNPO団体等が主体となる横浜市内の文化芸術活動を募集し、助成を行っています。今年度の採択は29団体。横浜市内のあちこちで行われる、色とりどりのアート活動が集まりました。5月29日には、さっそく今後へ向けてのキックオフ・ミーティングを開催し、団体紹介や事業の説明、いま困っていることなどを発表し合いました。

普段の生活の中ではなかなか行き来のない地域でも、アート活動を通じてつながれることはないかと、短い時間の中で交流をはかる姿が会場のあちこちで見受けられます。近所でこんなことやっていたんだ、前に住んでいたあの町にはそんな場所があったんだ、など。横浜が、より立体的に見える会となったようです。

29団体の活動は、今後いろいろなかたちで発信していきます。お楽しみに。



事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も、横浜市内の
あっちこっちへうろうろしています。

11 4月14日(火)

本の特集をする、ということで、まずはご近所、横浜駅近くの「喫茶へそまがり」へ。ここは一軒家を開放した漫画多めのブックカフェ。まるで友達の家や部室のような雰囲気、お客さん同士が独特な距離感の中、本を読んだり食事をしたりとくつろいでいる。やさしい店主に「上大岡にも似た感じの店があるよ」と教えてもらう。



14 4月25日(土)

今日は横浜農協田奈支店春まつり。家族連れも多く賑わっている。植木や肥料、農機などの販売を行うブースの奥では、茶まんじゅう、よもぎ団子の実演販売。さらに、田奈の小麦粉を使ったというスパゲティまで売っている。直売所では長津田ベーコンや田奈うどんも発見。横浜の食の豊かさに触れ、おいしい一日を過ごした。



12 13 4月15日(水)

戸塚区・舞岡八幡宮にて800年続くという「湯花神楽」の奉納を見る。次々に展開されるいくつもの短い神楽。終盤では天狗も登場し、集まった子どもたちの目は釘づけだ。帰りは上大岡駅で降り、昨日教わった「まったり家」へ。引き戸を開けると、そこは幼い記憶にある友だちの家そのもの。押入れの本を読みながらお茶をいただいた。



15 5月16日(土)

網島ラジウム温泉東京園が路線工事のため休園になるとのニュースを聞き、駆けつける。園内は宴会場からカラオケの歌声が響き、広間では湯上り姿でテレビで相撲を見ている人たち、将棋を指している人たち。まるで正月に親戚が集まったような雰囲気、ここにいる人全員が、なんだか古い知合いのように思えてくる。



ヨコハマ アートサイトとは

ヨコハマアートサイトは、市民やNPO団体等が主体となって地域課題へのさまざまなアプローチを行う文化芸術活動を支援することで、地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図る「地域文化サポート事業」です。そのために、一年を通じて、参加者間の研修や交流に取り組んでいます。平成26年度より、STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団で事務局を担当しています。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
(NPO法人STスポット横浜
地域連携事業部 内)
TEL:045-325-0410
FAX:045-325-0414
WEB: <http://y-artsite.org>
MAIL: office@y-artsite.org



@Y_Artsite



ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.004

発行 ヨコハマアートサイト事務局
編集 NPO法人STスポット横浜
テキスト 小川智紀 池田友実
鬼木和浩
デザイン 相澤事務所
撮影 福井裕子
印刷・製本 合資会社 三島印刷所
協力 有限会社 アマガサ印刷所
おむすび文庫/東寺尾図書館
株式会社 有隣堂

※五十音順、敬称略

発行日 2015年6月30日

季刊誌についてのご意見・ご感想も
お待ちしております。

もしもし、そちらの様子はどうですか？

土地の記憶と時間と 想いを紡ぐ術

5月初旬。福岡県の太宰府から「くすかき」の便りが届いた。封を開くと、樟の葉を包んだ「芳樟袋」の懐かしく澄んだ香りが広がる。こうして毎年、初夏の訪れを感じ、遠くの地で続く、この活動に想いを馳せている。

「くすかき」は2010年にアーティストの五十嵐靖晃さんが太宰府天満宮で始めた活動だ。4月になると天満宮の樟の木は芽吹き、沢山の葉を境内に落とす。五十嵐さんは、その葉を地域の人々と掃き集める。4月の3週間、朝夕の2回。今年は朝の時間も「出勤や通学前の春の過ごし方」として定着してきたという。

最終日は掻き集めた樟の葉で、かつて境内にあった「千年樟」の姿を描く。そして、その葉が落ち続けた土地の千年の時を想う。この「見えないけれど大切なもの」と向き合う時間こそが大事なのだという。

その後、一年の記憶の結晶として「樟香舟」と「芳樟袋」に形を変えた樟の葉は、「くすかき」を支える全国の人々へ届けられる。

土地の記憶。千年の時間。いつもと少し違った日常の過ごし方。様々な人々の想いを紡ぐアーティストの仕掛ける「こと」に触れるたび、いま、私たちの身の回りにある地域文化の始まりも、また、こういうものだったのかもしれないと想像している。

アーティスト 佐藤李青

くすかき - 太宰府天満宮 -



地域文化のかがり火

第4回 古民家に流れる凜とした時間 山の上ギャラリー(戸塚区)

そこへたどり着くまでに少々時間がかかるのは覚悟の上だ。横浜港から遠く離れた小高い丘の上に住む一軒の古民家は、近所にある日本料理店が、かつて北鎌倉にあった酒屋の建物を移築して、「山の上ギャラリー」として開設したもの。

歪んだ梁が空間を横切り、古めかしい金庫がそのまま残されている。大きな窓からは、外の新緑の光がまぶしい。隅々まで美意識が行き届いたこだわりの展示空間では、厳選された美術品や工芸品が、来訪者から語りかけられるのを静かに待っている。

このギャラリーの近くには、同じ日本料理店が営む陶芸の工房もあり、日々の生活をこだわりの品々とともに過ごすことを理想に掲げ、新たな作品を創り続けている。山あいにある芸術の郷とも呼ばれるような施設群である。

この場所ですぐに長居してしまう人もいるらしい。何でも手軽に手に入ることが良しとされる現代にあって、時間をかけないと見えてこないものもあるのだらう。喧嘩から隔絶されたこのギャラリーには、作品と空間と真摯な心とが生み出す凜とした時間が流れている。



山の上ギャラリー(戸塚)